

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

230余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき

讃岐の金毘羅酒として親しまれてきた金陵が、酒づくりの贅をつくりおくりたい「純酒」煌。金陵の歴史は今をきかへること三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金星羅さんの薦ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味は、金毘羅詣の人々からも親しまれてきた。純酒「煌」のえも言われぬ風味と心へには、金陵の心意気と酒づくりの神髄が細やかにうつっています。

真珠玉のやとく搗きあげ

水晶のやとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒「煌」に使っているのは、酒造好適米の中から選りぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のわずから削りほの、まるで真珠玉のようなだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「一廻二廻三造り」といわれいるとおり複雑多岐にわたる工程を熟達の手でつくっていく。

つごなしにいく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるように精魂をこめ、技の限りをくわして低温でじっくりくりあげる。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米けから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品。この稀なる清酒「煌」を、日本酒をこなく愛するみなさまにじっくりと味わいつけていただきたい。

煌 金陵
超特撰

税込
標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml

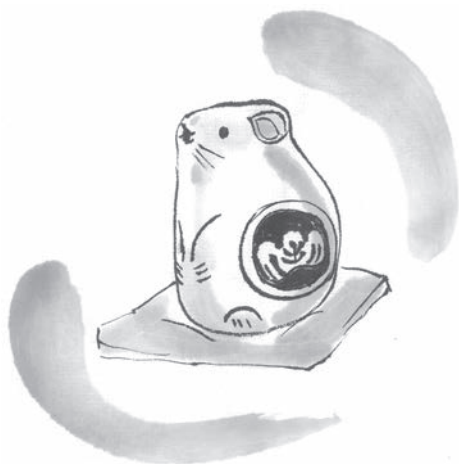
ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町八三三 電話(〇八七)七三三 四三三
未生者の飲酒は有害であり禁じます。妊娠中や授乳期の飲酒は気をつけましょう。

酒林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第99号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集

酒と肴・魚くサワラという魚の面白さく	山本義久	20
災害報道を見て	志村栄至	18
絵と文 春が来た	佐川毅彦	16
ゆったり、のんびり	志村有弘	14
ほろ酔い詩歌紀行 — 続『俳風柳多留』	日高昭二	12
落語教室入門―創作落語への挑戦	池井優	10
犀星と朔太郎	井坂洋子	8
糖尿病性足病変（壊疽）	杉本忠夫	6
庚子元旦	山西無聞	4



絵と文

「さかもとふさ型絵染アート」の

展覧会とワークショップを開催

今村均陸軍大将と汪兆銘	宮地智子	34
妖魔悪鬼の地獄国(一)	池田一貴	37
妖魔悪鬼の地獄国(二)	池田一貴	37

表紙・グラビア：徳島県立阿波十郎兵衛屋敷

絵と文 牛蒡の花 中西美子 23

たんたん狸 高橋和島 24

義男の青春と別離 片岡義男 26

姫君の名は。 山本千明 28

信州上田の地へ 宮本富夫 30

展覧会とワークショップを開催 さかもとふさ 32

今村均陸軍大将と汪兆銘	宮地智子	34
妖魔悪鬼の地獄国(一)	池田一貴	37
妖魔悪鬼の地獄国(二)	池田一貴	37

庚子元旦

山西無聞

河鼠休盈腹

河鼠かそ 腹盈みちれば休やすめ

鷓鴣巢一枝

鷓鴣しゅうりゅうは一枝に巢すくう

智多奇物起

智多ちたければ 奇物きぶつ起おこる

縁督學無為

督とくに縁よりて 無為むゐを学まなばん



今年の干支は庚子かのえねなので、今年も「ねずみ」にちなんだ「庚子元旦」と題する五言絶句を記載して年賀状を送ることにした。

起句と承句とは、「莊子・逍遙遊篇」にある「鷓鴣は深林に巢くうも一枝に過ぎず、偃鼠えんそは河を飲むも満腹に過ぎず。(ミソサザイという鳥は、深い林

の中に巢を作るが、必要なのは一枝だけある。カワウソは、黄河の水を飲むでも腹が一杯になればそれ以上はいらない)を踏まえたものである。偃鼠はここでは川獺のことであるが、ドブネズミをいうこともある。本詩では、黄河に棲むネズミの意味で河鼠とした。人間にとって本当に必要なものは、

それほど多くはない。それ以上のものを無理して求めて一喜一憂するのは、肝心の人生をいびつなものにする。「論語」にも「過ぎたるは尚及ばざるが如し」とある。
転句は「老子」の「民、利器多くして邦家まつ滋ますます昏くらし。人、智慧多くして奇物きぶつ滋ますます起おこる。(技術が進んで便

利になればなるほど社会は暗くなる。人間の知恵が増せば増すほど奇怪な物事が起こる。」を踏まえた。文明の進歩は、人類に大きな利便をもたらしたが、それに伴って、心のゆとりとか人間にとって大切なものが見失われているのではないかというのである。

莊子も「養生主篇」において、「吾が生や涯^やり有り、而して知や涯^や無し。涯^やり有るを以て涯^やり無きに随う、殆^{あやう}き已。」（人間の生命には限りがあるが、知の働^{はたら}きには限りがない。生命の有限性を考えずに、知の赴くままに無限を追求すれば危うきことこの上ない。）といっている。

結句の「縁督」は「督に縁りて以て経と為さば、以って身を保つ可く、以って生を全うす可し。（莊子・養生主篇）」を踏まえたもの。「督」とは着物の背中の中央の縫い目のことで、転じて真ん中の意味。「縁督」は善にも悪にも偏らない中道に従うこと。「経」は生活の根本原理、基本原則。「無為」は老子・莊子が理想とした人間の生き

方で、人間の賢しらやなまじつかな知恵を否定し、世間の価値観に振り回されず、あるがまま、自然のままに生きることである。

無為自然に生きるとは、「毎日をポーと生きる」ことに最大の意義があるとポーと考えて生きている私の日常生活と完全に一致する。今年も家内の目を気にしながらも、自信を持ってポーと生きたいと思う。

我が家は家内と私の二人暮らしである。私は目立たないよう出来るだけ地味な服を着て、時には終日バジャマのまま、居間でもなるだけ動かないように努力をしているが、家内は、私が長椅子に横になってカリントを食べたり、テレビを付けたまま（付いてさえいれば、番組は関係ない）瞑想に耽っている（老・莊の無為を実践しているのに）、まだ五時間しかたつてないにもかかわらず、まるで巨大な生ゴミを見るような目で見るのである。もし私が長椅子に横になっている私を見たとしたら、私はそのような無礼な態度

は決してとらない。巨大な、「腐敗した」生ゴミを見たような目を向け、吐き気をこらえて即座に家を飛び出し、二度と帰らないだろう（帰らなくても巨大な「腐敗した」生ゴミの私が残っているので問題はない）。

このように家内とは意見が一致することは殆どないのであるが、あるとき家内が化粧をしながら「鏡を見るたびにいやになる」とつぶやいているのを聞いて、そのときは本当に「俺もそう思う」と思った。そして珍しく意見が一致したことに感動した。また家内が、まだ正常な観察力と正しい判断力を残していることに感動し、さらに美的センスにも優れていることにも感動した。そこで家内を慰めようと思って、「お前はまだいいよ。いやになるのは鏡を見た時だけだけど、俺はお前の顔を見るたびだから」と優しく心を込めて言った。その後どのような状況になったかは、とても文章には書けない。たとえ書けたとしてもこの本の編集者によって削除されるだろう。

糖尿病性足病変（壊疽）



杉本 忠 夫
（虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医）

旧年、令和天皇の即位儀式が盛大に行われました。

本年、実質的な令和の年になりこれからの日本がますます発展することが楽しみです。

医療においても高齢者の健康への取り組みが、新しく改訂されております。たとえば、運動する場合に大きな支障がない方々には、ケガに注意しながら個々の方に合った運動療法を取り入れた、健康への取り組みなどが行われております。

では、話を本題に戻しましょう。
糖尿病の方に恐れられている難治性糖尿病足病変（壊疽）についてです

が、糖尿病を持っている方が足に怪我をされると、糖尿病壊疽になるのではないかと、よく外来で相談される方をお見かけします。

糖尿病の知識が普及していなかった約四十から五十年前は、一般家庭で上下水道が整備されておりました。その時代に（くみ取り屋さん）が、この家族には糖尿病の疑いのある人がいると、臭いで指摘されました。心配になり病院を受診された方もおられた程、糖尿病の知識が低かったのです。四十年前前はこのような低い医療レベルの知識でした。
当時、結果としてこのように糖尿病

の発見が遅れてしまっておりました。

糖尿病についての知識が現代ほど普及していない時代に、このような足の難治性潰瘍が生じ病院にかかられている患者様がおられました。それまでは、糖尿病について全く知識がなかったのですから、しかたがありません。

重い腰をあげて来院された時には、体温は三十度近く、来院時の患者様の患側の足は化膿し、腫れ上がって、傷口から血膿が滲んでいました。時には嫌気性菌の感染のため悪臭を発生している場合もありました。

患者様の血糖値は三百㍻／dl前後と高値で、全身的には三十九から四十度

の高熱も伴っており、消耗された状態でした。

当時の医療では抗生物質はペニシリン、初期の合成ペニシリン製剤、ストレプトマイシン、クロロマイセチンがやっと実用化された時代でした。

重症のためこれらの抗生物質を患者に全身投与して体温の経過と足の潰瘍の状態を観察しておりました。

血糖のコントロールは幸いなことに、一九二二年に発見されたインスリン製剤があり、インスリン製剤を点滴に混注して持続的に血糖のコントロールを行うことができました。

このような精力的な治療にもかかわらず、改善しないことがあり、このままの治療法で経過を診ることで敗血症に陥り、生命が危険に陥ることがありました。生命の危険を避ける目的で、止む無く患肢の切斷に至る場合があります。

患者様はこの切除した患肢の代わりに義足をつけて退院されました。

ところで、最近、医療技術の進歩に

目を見張る進歩があります。

その一つは新しい広範囲の細菌に効果のあるブロードスペクトラムの抗生物質と抗菌剤の出現です。この抗生物質および抗菌剤が効かない場合は、他の要因を考えに入れられないといけないと考えられております。

糖尿病性壊疽は長い間の高血糖による血管の動脈硬化（老化現象）です。

言い換えまると動脈硬化による慢性的な血流不足による局所の酸素不足および栄養不足です。このことが糖尿病性足病変の要因になるのです。

そこで、医学の研究者たちが目をつけたのが血行再建術です。つまり、血流が不十分なところへ血流をもどしてやれば足の壊疽も回復が早いのではないかと考えた訳です。

この企てでは成功し、最初、体の中でも太い血管が選ばれました。大動脈から分岐する腸骨動脈です。この血管のバイパス術が成功してから大腿動脈、それより細い下腿動脈が血行再建術の対象になりました。現在では下肢の動

脈が対象になっております。

血行再建術の方法はいろいろな方法で行なわれております。

その代表はバルーン（ゴム風船）を利用したものです。動脈の狭窄部位までカテーテルでバルーンを誘導し、狭窄部位でバルーンを膨らませて狭窄を解除する方法です。

二番目には、最近よく使われる代替え人工血管に置き換える方法があります。

三番目は動脈のバイパス術を行う方法で心臓の冠状動脈によく使われる方法です。

ところで、動脈硬化は糖尿病だけが動脈硬化を増悪するのではなく、高血圧をお持ちの方、高脂血症の方、高齢な方にも認められます。

今年から糖尿病の方だけではなく高脂血症、高齢な方も足のケガに気を付け、足にケガをした場合は消毒等に努めましょう。

令和二年は下肢の動脈硬化と下肢の壊疽の予防の年にいたしましょう。

犀星と朔太郎

室生犀星はじつに多作な書き手である。小説の数も多ければ詩の数も多い。詩は二千篇前後、発表しているのではないだろうか。詩集は、詩文集などを除いた単行詩集だけでも二千冊を超える。

その詩集の中で最も有名なものが、若かりし犀星が書いた『抒情小曲集』（大正七年）だろう。「ふるさととは遠きにありて思ふもの」（「小景異情 その二」）も収められていて、犀星の詩は知らなくても、誰でも一度はこの文句を聞いたことがあると思う。

私も犀星の詩集の中でいちばん愛着がある。四季折々の自然を詠んだ詩が



ほとんどなので、春だと「雪あたたかくとけにけり」という詩「ふるさと」の一行を思いだし、台風シーズンが来ると、「あらし来る前」という詩を思い出すといった具合だ。その「あらし来る前」を引用する。

さらさらと秋はながれゆく
草の上に 水の上に
ええてるは銀の羽虫となり
きらめきつつ
飛びかよふ

震へる木ぬれを眺むれば
あらしは近よらむとすることし

井坂洋子

（詩人）

くさむらのあたり
あらしの前のそよ風起り
空すこしく
やや動く

嵐の前の不穏な空気を鋭く察知していて、最終連など、みごとにだなぁと思う。「ええてる」というちよつと異質な語がでてくるが、これは麻酔薬のエーテルというよりも、光や電磁気を伝える仲立ちとして宇宙に満ちている物質のことと捉えたほうが、詩の意に沿うだろうと思う。飛び交う「銀の羽虫」というイメージが美しい。

虫好きの犀星は晩年、虫をたくさん

飼い、今夜の夜伽はこの虫に決める
と、虫籠をかかえて自室に入っていた
たそだ。

それにしても不死鳥のごとく（とは
ありきたりの形容だが）甦る作家であ
る。

一昨年も、大泉洋と宮崎あおいの主
演で「あにいもうと」というテレビド
ラマが放送された。犀星が昭和九年に
発表した小説であり、脚本の山田洋次
が現代風にアレンジし、ストーリーも
ホームドラマ化していたが、取っ組
み合いのケンカをしながらも強く結
びついた兄妹という中軸は原作通り
だった。今まで幾度も映像化された、
「杏っこ」と並ぶ犀星の代表作である。
大正、昭和の詩壇や文壇で活躍した
室生犀星には、三歳年上の萩原朔太郎
という詩友で親友がいた。朔太郎は詩
ひと筋であり、詩論をたくさん残して
いる。

お互いその詩は認めていたが、理屈
の嫌いな犀星は、朔太郎の詩論を、血
の通ったぴちぴちしたことがひとつ

もないとけなし、朔太郎は犀星の小説
を新聞の三面記事みただと斬り捨て
た。彼らのケンカはさぞすさまじかつ
たことだろう。

ともに娘がいて、それぞれが父のこ
とを書いているのなどを讀むと、まる
でニール・サイモン脚本の映画「おか
しな二人」みたいだったのではないか
と思う。朔太郎はお風呂嫌いで掃除嫌
い、食事中はごはんをぼろぼろこぼ
し、老いた母が息子用のよだれかけを
作って、それをかけて食べていた。

一方の犀星は神経質といえるほどの
几帳面。物の位置は寸分たがわずに置
かれ、日課もきちんと定まっていた、
それを崩すことはなかった。庭を造つ
たり、陶器や骨董、お茶などの趣味が
あった。

このような文人のあり方は、犀星が
自分の野生児のような性情を克服した
結果だ。

犀星は、加賀藩に仕えていた足輕組
頭の父と、年若い小間使いとの間にで
きた不義の子で、お金を付けて貰い子

に出され、同じように貰われてきた血
の繋がらないきょうだいに貧しく暮ら
した。粗暴で学校の成績も芳しくな
く、十三歳で裁判所の給仕に働きに出
された。けれども彼には唯一ことばの
才能があり、それを突破口にして晩年
は文壇の大家の一人となった。つまり
立身出世したのである。

朔太郎は前橋の、代々の医者之家に
生まれた。紅茶にウイスキーを入れて
飲んだり、明治の末に日本に三つしか
ないマンドリンのひとつを手に入れて
作曲したりと、ハイカラ趣味のお坊っ
ちゃんだった。

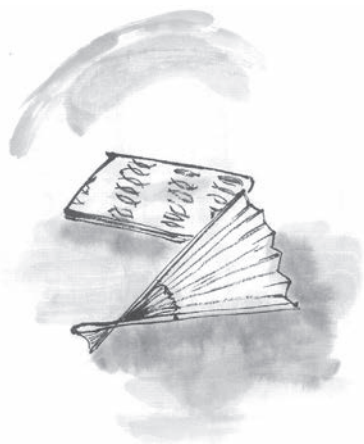
しかし彼は医者になる気はさらさら
なく、入退学を繰り返して、結婚すれ
ば妻に逃げられ、酒に溺れ、詩人と
して名はあがるものの、体をこわして
五十五歳で亡くなっている。哀れだが
詩人の生涯としてみるとかなり魅力的
だ。

この二人が各々歩んだ道はドラマ以
上のドラマだと思う。

落語教室入門——創作落語への挑戦

池 井 優

(慶應義塾大学名誉教授)



桂歌助の落語教室

近所を散歩していると、街の掲示板に張ってある小さな広告が目についた。

「桂歌助の落語教室——厳しい修行ナシ、笑って覚える落語……」

我が家から徒歩三分の小さなカルチャーセンターでプロの落語家が教えてくれるというのだ。六十年以上前、大学の落語研究会のメンバーとして、落語にのめり込み、地方の養老院の慰問などやったこともあり、受講するか

しないかは別にしてちよつと覗いてみようと思った。ビルの三階の小さな部屋が事務所と会場であった。落語ブームのなかで、各地の落語教室は満員、千葉県船橋の市民センターでは受講希望者が殺到し、三カ月待ちの状況だという。

この教室も申込みが多く、無理ならあきらめて帰ろうと受付を訪れた。「満員ですか」と聞くと「あなたで二人目です」との答えが返ってきた。否

応なく入門することになった。

たった二人での稽古が始まった。もう一人は中年の女性、書道教室の先生でもある。扇子、手拭いの使いかた、人物の位置など基本を教わり、実践に移る。「道具屋」「ちはやふる」など登場人物が少なく、途中で笑いがとれるくすぐりの多い斬から入っていた。二人が演じて、歌助さんがコメントとともに実際に演じてくれる。毎月一回の教室が楽しみになった。

やがて歌助さんがこのカルチャーセンターでおこなう独演会の前座を二人でつとめることになった。だがなんと女性会員が多忙となり辞めてしまったのだ。その後、ひとり加わったが、そのメンバーも仕事との調整がつかず、退会した。ということは、毎回歌助さんと一対一で教わることになった。

歌助さんは変わった経歴の持ち主である。新潟の高校を出て、東京理科大学の数学科に進学。そのままいけば、故郷の新潟で数学の教師となつて、傍ら野球部のコーチとして甲子園を目指

していたかも知れない。しかし「笑点」の名司会者として知られていたが、三遊亭圓朝の古典の大作を毎年高座にかけ独演会を開くなど実力ある歌丸師匠の芸にほれ込み、弟子入りした。

そうした歌助さんに古典落語を教わっても所詮プロには到底敵わない、だったら自分で落語を作り披露して指導してもらうのはどうかと考えた。テーマはなににするか。歴史が専門なので、さまざまな事柄の由来をエピソードを交えて語る「ことはじめ・シリーズ」を創作することにした。

創作落語「紅白歌合戦ことはじめ」

第一作は「紅白歌合戦ことはじめ」。大晦日の最後を飾る「NHK紅白歌合戦」は誰が考え、いつ始まったのか。

—NHKに近藤積という名ディレクターがおりました。通称コンツモさんは鶴のように瘦せた体を折り曲げるようにしてせかせか歩きながら絶えず聴

取者に喜んでもらえる番組は作れないかと考えておりました。まだテレビはなくラジオ、しかも民放はなく、NHKだけの時代です。コンツモさんのアイディアは、男女対抗、つまり性別に基づく対戦はスポーツでは不可能だが、歌ならできる、さまざまな曲をどのような順序で配置するか、審査の間発表、司会者の舌戦など視聴者をハラハラさせ、最後に審査員によって白組—男か、紅組—女かどちらが勝つか決まるという企画でした。一九五一年一月三日NHK放送会館でおこなわれた第一回紅白歌合戦は大変な反響を呼びました。ラジオの中継が始まると、「紅勝て」、「白組がんばれ」の電話が殺到し、NHKの電話回線が故障したほどでした。トリは白組藤山一郎、紅組渡辺はま子でしたが、大ヒット曲のある岡晴夫、田端義夫は出ていません。「あんな出演料の安い番組にはでないよ」。選に漏れたのではなく、正月は稼ぎ時と辞退したのです。紅白の知名度や歌手にとつての価値もその程度でした。

やがて、紅白歌合戦が大晦日に移り、国民的行事となると、紅白に出ることが歌手の夢になります。紅白を決定的に変えたのが、テレビの中継、特に東京オリンピックを機会とするカラーテレビの普及です。歌もさることながら、派手な衣装、ダンスなどのパフォーマンスも重要な要素となり、それに伴って、若いアイドルグループなどが登場し、一家でみる「国民的番組」ではなくなっていました。

「見る気がしない」、「知らない歌ばかりだ」……かつて紅白歌合戦を楽しんだ古い世代から多くの批判がNHKに来ていると聞いています。

謎かけで締めましょう。「NHK紅白歌合戦をかけて、トランプ大統領と解く」、「その心は?」、「多くの批判があるが、やめる気などさらさらない」。

「野球始球式ことはじめ」、「カラオケことはじめ」、「プロ野球外国人選手ことはじめ」……テーマはいくらでも

ほろ酔い詩歌紀行

続『俳風柳多留』

日 高 昭 二

(神奈川大学名誉教授)



前回にひき続いて、『俳風柳多留』を読んで、なお一層ほろ酔い気分に浸ろうと思う。

のっけから、ぎよっとする言葉で壓縮ながら、まずは次の句から。

手拭にきんたま出来る一さかり

この前の句で、一羽の鶏があたかも時をつくる気構えで爪先だった姿を捉えたのを受けて、その何かを「つくる」姿を若者に移しかえて詠んだ句である。手拭の片端に糠を包むと丸い形が出来る。それを肩に掛けて銭湯に行く若者。「きんたま」はそうして出来た手拭の形状をいつたものである。そしてこの句を受けて、さらに次のような句が付けられている。

杖突の酔はれた所は盛り直し

「杖突」とは、幕府の小普請方の役人のこと。建築の際に「水盛り」といつて敷地や基礎部分などの測量にあたっていた。その役人が振舞酒に酔って計量したりすると、その「酔はれた所」から早く水が漏れ、結局「盛り直し」になる。普通は女性が使う「糠袋」の化粧気を隠した若者の「さかり」から、酒に酔った役人の勢いへ、イメージ豊かな転換がなされた付け句である。

他人から酒を振舞われば、誰でも上機嫌になるのは必定。そうした江戸の職人たちの姿は、川柳の世界における主人公である。

上下で帰る大工は取り巻かれ

棟上げ式に袴姿で出席したのは大工の棟梁であるうか。祝い酒に酔って手下の職人に両脇を抱えられて帰る、その上機嫌ぶりが何とも可笑しくいじらしい。

だがその一方、同じく上下を着ても、だらしなく酔いしれた姿にはきつい一句が呈されている。

上下を着て文盲な酒を飲み

「文盲な酒」とは、もちろん愚かで、見苦しい酔いぎまのこと。まして袴の礼装に身を包んでの酔っ払い姿ほど見苦しいものはない。短い一句のなかに、袴＝礼装と文盲の酒＝乱酔とが

あざやかに縫い取られているのを見ることができよう。

その振舞いが酒ではなく、水のときはどうか。

舌打ちで振舞水の礼はすみ

ここでの「振舞水」は、おそらく夏の暑い日に通行人に自由に供されたものである。したがって、その礼は、「ああ、旨い」と舌を鳴らすだけでいいというわけであろう。振舞酒と振舞水と、心憎いほどの対比の妙である。そしてもちろん川柳には、酒を飲まぬ人々の姿もしつかりと捉えられている。

忝人者^{ひとじ}飲まぬかはりに忝朱^{にしし}がつき

「忝人者」は「一人者」＝独身者のこと。「忝朱」は銭の「二朱」のこと。小判一両の八分の一に相当するということ。そして「忝朱が」とは、「二朱が餅」のことで、二朱分の餅を搗くことをいう。酒も飲まずにせつせと働い

た独身者が、酒のかわりに腹一杯に餅を食うという正月風景である。

そうした働きの者の正月がある一方、年忘れの酒でしくじった者もいる。

翌日は店を追はるる年忘れ

「翌日」という言葉には、まさか年忘れの翌日に、店を追放されようとはゆめゆめ思わなかったろう、という驚きが隠されている。だが、それ以上にここに隠されているのは、店を追われたその原因で、おそらく酒を飲んだ狼藉が「年忘れ」という言葉に暗示されているだろう。

『俳風柳多留』には、そうした酒にからまる風景が、あちこちに表現されているのを見ることが出来る。

羽子板で茶を出しながら逃げ支度

一見すると、ここには酒酔いの景色があるようにはみえないかもしれない。だが、「羽子板」という言葉で

正月を、また「茶」という言葉で、逆に「酒」を連想するのは、それほど困難なことではあるまい。これは、正月に娘児が羽子板を茶盆がわりにして酔客に恐る恐る出している様子なのである。今ではみることが出来なくなった正月風景のひとつである。

凱陣^{がいく}の日には生酔い五百余騎

いくさに勝って凱旋すると、当然祝い酒となる。そこで五百余騎の酔っ払いが出る。この豪快な景色に対して、『俳風柳多留』は次のような句を付けている。

搥鉢^{すりばち}を押へる者が五六人

これは長屋の連中が初鰯で一杯やるために、辛味噌つくりの「搥鉢」を囲んでいる図だという（宮田正信『新潮日本古典集成』）。その鉢を「五六人」の飲み仲間が代わるがわる押えているという、じつに良い眺めではないか。

ゆったり、のんびり



志^し村^{むら}有^く弘^{ひろ}

(相模女子大学名誉教授)
文芸評論家

私は、勤めていたころ、書き物の中に「研究」という語をほとんど使わなかった。研究とはどのようなものであるのか判断としないからなのだが、「研究」という言葉の代わりに、「考察」・「一考察」・「考」・「攷」という、曖昧な言葉を使用していた。

〈研究〉という言葉を目にすると、今は亡き某先生を思い出す。その先生は作家の詳細な年譜を作ること知られており、年譜作成の仕事を「年譜勉強」と称していた。他界するまで作家や文学作品に関する本を出し、大学院生の論文発表の場として自費で雑誌を作ったりしていた。しかし、「この何年間に研究論文を何本書いたか」など

と問われると、「0」（ゼロ）と答えていた。それは、自分の書いているもの、調べていることが「研究ではない」ということではなく、「研究」の定義に疑問を抱いていたのだと思う。

作家の島尾敏雄は「自分の書いているものが小説であるのか何であるのか分からず、苦し紛れに書いている」と語っていたが、研究と小説の相違があるとはいえ、これは、某先生が「研究」という言葉にこだわったことと似ているように思う。

私は小学校に入るとき、舌がよくまわらなかったこともあり、学校に提出する身上書のようなものに、母であつたか、姉であつたか、「授業中、あま

りあてないようにして下さい」と嘆願書（？）のようなものを添えて提出していた。私は、これで授業中、先生からあてられないですむ、と嬉しく思ったものの、少し傷ついたようにも記憶する。

幼いときは、地面を掘って蟻を巣ごと木箱に入れて眺めていたり、バッタや蝶を捕えたりするなど、多分に人間以外の動物に関心を持っていた。魚釣りも好きであったが、よく写らないおもちゃのようなカメラで遊んでいた。後にコンパクトカメラをぶら下げ、史跡探訪を好むようになったのも、少年時からの性癖が多分に影響していると思う。

小学生のころ、将来何になるとか、社会に対する積極的な働きかけの意識など全くなく、学校へ行く理由も分からず、親から見ると、いわばどうにもならない性格であったに相違ない。そうであるのに、小学校時代、卒業式に先輩たちが歌う、「あおげば尊し」の歌を聞くのが好きであった。終業式に歌う「蛍の光」同様、歌の意味もよくわからないのに、「あおげば尊し」のメロディーが好きであった。少し成長してから、「身を立て名をあげ やよ励めよ」という一節に、自分にはとても無理だという思いもあり、いささか疑問・抵抗を感じないでもなかったが、あのメロディーは好きであった。

後に、私が中世の隱者鴨長明の文学・思想に惹かれていったのも、自分の非積極的な性格と無関係ではなかったのだろう。

数年前、私はある新聞に「古本だけが好きで生きていた」という随想を書き、そのあとまもなく宗教関係の雑誌から「余命半年と告げられたら何をし

たいか」と問い掛けられ、「故郷の山河を歩きたい」と書いた。いずれも人生の厳しさなどまるで感じられないことを書いたものだが、それでも自分の心のうちを正直に書いたつもりだ。

森水晶の歌集『羽』（コールサック社、二〇一六年）に「一生泥棒 一生罪人 一生泥沼 一生咲かない」という厳しい自己凝視の歌があるのを見て、いたく感動した。そうして最近、「北空知新聞」（北海道深川市）の文芸投稿欄に、香葉子という人の「正論はわかるがわたし電池切れ」、また、一味という人の「手酌酒あとは寝るだけ独り言」という川柳を見つけて、大喜びをした。香葉子さんののは「あんたの言うことは正しいよ。でもねえ、あんまり強く理屈をこねないでよ。疲れていて、わたしあ、反論するエネルギーなんぞないのよ」と言いたいのであろう。一味さんののは、『万葉集』巻第三の「讃酒歌」の一つ、「駭なき物を念はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし」を想起した。『万葉集』の歌は「く

だらんことを考えるより、酒を飲んだらいいと思うよ」ということであろう。昔のことである。作家の松原敏夫は、毅然とした姿で、孤高の精神を抱き続けていたように見えただけで、「生きていて、良いことは何もなかった」と、小説の中に書いていた。それでも、夕方の六時過ぎ、ほろ酔い状態で「人恋しくなつて……」と、よく電話を掛けてきた。日々、孤愁を嘯み締めていたのであつたらうか。松原は「ふらて」という個人誌に、いぶし銀のような作品を書き続けていた。

中谷孝雄（小説家）が「松原さんの作品は安心して読むことができる」と語っていた。「安心して」というのは、作品としての完成度が高いということなのであろう。その中谷は「人生はなるようにしかならない。人間は怠けなければいけない」とも語っていた。こうした先人たちの風貌、言葉を思い出す。ゆつたり、のんびり、歩んでゆくことができたなら、それでよいのか、と思う。